

## 高岡の特産産業

高岡の特産産業の起こりは、今から約 400 年前、加賀藩二代藩主、前田利長公が高岡に入城し、鋳物工場の開設、綿取引所の許可など、新しいまちづくりのための産業振興に力を注ぎ、保護育成を図ったことに始まる。このように古くから育まれた高岡の産業は、その後、全国に誇りうる地場産業として目ざましい成長を遂げ、そこから発展した伝統的技法等は、商工都市高岡の原動力となっている。

この様に、伝統と特色ある地場産業に支えられ、「ものづくりのまち」として発展を遂げた高岡市は、平成 21 年に開町 400 年の節目の年を迎えた。銅器や漆器、仏壇に代表される伝統産業は、先人のたゆまぬ努力によって培われた匠の技術・技法を今日まで継承し、独自の発展を遂げてきている。また、アルミニウム等の近代産業も発展し、多様な産業基盤が根付いている。

さらに、平成 20 年 4 月には、これまで生産に重点を置いていた金工、漆工等の分野において、高岡地域文化財等修理協会が設立され、修理ビジネスという新たな市場を開拓するとともに、富山大学芸術文化学部と連携し、後継者育成、技能の継承に取り組む新たな動きも出てきている。

## 調査要領等

この調査は、業界振興の基礎資料とするために、高岡の地場産業の生産、出荷、販売動向等を、主な事業所を対象に実施した。掲載されている数値等は、回答のあった事業所の数値等を累計したものである。

調査の方法は、アンケート調査により、隔年調査として実施している。今回のアンケートの回収率は、70.5%であった（前回 74.4%）。

調査対象期間は、各企業における、平成 28 年度決算期間である。

## 目 次

高岡の銅・鉄器	1
高岡の漆器	9
高岡のアルミニウム	14
高岡の仏壇	18

## 高岡の銅・鉄器

### 【産地の特色】

高岡銅器は、慶長 16 年(1611 年)に加賀藩二代藩主前田利長公が高岡のまちの産業振興策のひとつとして、現在の高岡市金屋町に鋳物工場を開設したことに始まる。当時は鍋・釜・農機具などの鉄鋳物が主体であったが、幕末から銅器美術工芸品へと発展し、明治時代にパリ万国博覧会に展示されるなど、世界的に知られることとなった。戦時中、軍事使用のため金属が手に入らず、壊滅的な打撃を受けたものの、戦後、先人たちの努力により、急速に復興し、さらに新製法の導入により大量生産体制が確立され、昭和 50 年2月には伝統的工芸品として国の第一次産地指定を受けている。

産地の特徴として、製造・加工部門では工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことや、集積度合いが全国の産地に比べ、かなり高いことなどが挙げられる。製造業者は作ることに専念し、新商品開発や販売機能はほとんど産地問屋が担うという分業体制が採られてきたが、近年、産地問屋からの発注が減少したこともあり、独自に国内外に販路開拓を行う製造業者が増えてきており、銅器産業の構造に変化が見受けられる。

### 【銅・鉄器の動向】

平成 28 年度販売額は、銅器が約 110 億 6 千万円で対 26 年度比 5.6%、鉄器が約 3 億 4 千万円で対 26 年度比 28.5%とそれぞれ減少している。ライフスタイルや嗜好の変化による個人消費の落ち込みなどが減少の要因として考えられる。一方で、銅器の販売額を品種別にみると、テーブルウェアやアクセサリ、小物などの品種が増加している。高岡銅器の伝統を継承しつつ、独自の着色法による新商品やデザイナーとコラボレーションした商品等の開発、また、新技術開発に取り組んできた成果が表れていると考えられる。

銅器・鉄器の地域別販売割合をみると、関東地域と海外への輸出が好調であることが分かる。

平成 27 年より高岡市、南砺市、東京藝術大学が連携し国宝法隆寺釈迦三尊像の再現事業を行い、職人による伝統的な技術と先端技術（3D スキャンなど）の融合による国宝の再現により、高岡銅器を広く発信することができた。このような取り組みにより、高岡銅器の知名度を国内外で向上させてきたことが、関東地域や海外への輸出の増加という結果につながっていると考えられる。

高岡銅器の高い技術力と新しい魅力を積極的に PR し、今後一層の産地の活性化に期待する。

## 高岡の漆器

### 【産地の特色】

高岡漆器は、加賀藩二代藩主前田利長公の産業振興策のひとつとして始まる。当初は、箆筥、長持、針箱、膳などの生活用品や家具が主であった。その後明和年間(1764~1772)に中国風の様式が取り入れられ、明治初期までに現在の高岡漆器の特徴である「彫刻塗」「勇助塗」「青貝塗」の3技法が確立され、産地の名声を内外に高めることとなった。これらの技は、歴代の名工によって伝えられ、多くの名作が作られるとともに、国の重要有形無形民俗文化財の高岡御車山に凝縮されており、高岡の文化として今日に継承されている。昭和50年9月には伝統的工芸品として国の産地指定を受けている。

高岡銅器同様、工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことも大きな特徴である。

### 【漆器の動向】

平成28年度の高岡漆器の販売額は、約6億1千万円で対26年度比10.4%減少している。漆器産業の販売額は1980年(昭和55年)をピークに減少傾向にあり、銅器業界と同様に、個人消費の落ち込みなどが減少の要因と考えられる。

このような状況ではあるが、積極的に新商品開発や販路開拓に取り組んでおり、品種別では箱類、室内調度品、盛器、その他については上昇傾向にあることが伺える。平成28年10月には、日本の伝統的工芸品を中国に紹介する初めての試みとして、「第1回日本工芸品展 in 上海 高岡漆器2016」が開催され、高岡漆器の展示会や製作実演が行われた。この他バイヤー商談会に参加するなど海外の販路開拓に取り組み、地域別販売割合では前回調査と比較し、輸出が3.2%上昇した。

その他、ガラスや金属などの異素材とのコラボレーションによる商品やスマートフォンケースやアクセサリといった日常使いできるカジュアルな商品など、現代の暮らしに合った商品開発にも取り組んでおり、こうした取り組みが相まって、今後、産業界が回復し、さらなる盛り上がりをみせることを期待する。

## 高岡のアルミニウム

### 【産地の特色】

高岡のアルミニウム産業は、本市の伝統産業である銅・鉄器の鋳物技術をもとに、昭和初期に鍋・釜などの日用品を製造し、近県及び中京方面に出荷したのが始まりである。戦後の経済復興と日本経済の成長からアルミ需要が拡大し、本市では豊富で低廉な電力と水を背景に、アルミ業界は急成長を遂げた。現在、住宅用・ビル用建材を中心に、エクステリア製品、家庭用厨房品、機械車両部品などを生産している。アルミ建材分野においては、本市の中核的産業をなすだけではなく、全国的な生産規模を誇り、富山県におけるリーディング産業の地位を確立している。

近年は、消費者意識の変化により、大量生産・大型消費の時代から少量多品種生産の時代へと移行しており、それに対応できる生産体制づくりに取り組んでいる。

### 【アルミの動向】

平成 28 年度のアルミニウム製品の出荷額は、約 3362 億 8 千万円で対 26 年度比 9.9% 増となっている。内訳としては、ビル用建材が約 700 億円(対 26 年度比 6.1% 減)、住宅用建材約 811 億円(対 26 年度比 0.5% 減)、エクステリア約 545 億円(対 26 年度比 0.7% 減)だが、日用・厨房品、産業用型材や機械部品において大きく増加しており、全体として出荷額は増加となった。

本市で大きなウェイトを占める建材分野については、平成26年4月からの消費税増税による新規住宅着工数が減少したことなどが影響し出荷額が減少したものと考えられる。非建材分野については、自動車や産業用機械等におけるアルミ需要が高まり、増加したものと考えられる。

また、近年では新たな取り組みとして、「アルミを中心とする軽金属分野における現状分析と今後取り組む課題についての考察」事業を富山大学と連携し行っている。アルミ産業の今度の動向を図り、高機能素材の研究、新技術・製品の開発等を行っており、今後のアルミ産業界の動向が注目される。

## 高岡の仏壇

### 【産地の特色】

高岡の仏壇は、慶長年間に指物師大場庄左衛門が高岡に移り住んで家具を作り、漆塗装を行ったとする記録があることから、このころが高岡での仏壇製造の始まりとされている。その後、天保年間に仏壇塗師高森重次郎の活躍などにより、少なくとも 150 年前には現在の高岡仏壇の基盤ができあがったものと考えられている。

当産地は、真宗王国という風土のもとで、藩政時代から今日まで、規模は大きくないものの、堅実な産業として地歩を固めてきた。

高岡仏壇は、材料にくさまき・いちよう材を使用している。これは、全国でも高岡だけが使用しており、長年の耐久力は最も優れていると云われている。また、高岡銅器の彫金の伝統を受け継いで冴えた技法を展開し、独自の工法による耐久力に優れた表金具の使用箇所が多いことも特長である。さらに、彫刻の使用部分が多く、金箔が仏壇内部に箔押されて、荘厳かつ美装華やかである。高岡仏壇は、古来の技術を継承し、あくまでも漆塗りを堅持している。まさしく、高岡の伝統技術の粋を集めているといえる。

### 【仏壇の動向】

平成 28 年度の仏壇販売額は、約 8 億円で対 26 年度比 33.4%減少している。核家族化や住宅事情の変化などによって仏間のない住宅が増え、戦後 70 年経った現在の日常生活の中で仏壇を拝む習慣が減ってきており、こうした生活様式の変化が極端に顕在化したことが要因として考えられる。

また、仏壇の小型化、簡素化が進み、価格が低下しており、仏壇の販売数に変化はないものの、全体として販売額が低下していることも要因として考えられる。

今後の仏壇産業界には、伝統を継承しつつも、現在の住宅事情に考慮した現代のライフスタイルに合う仏壇の製造、販売を行っていくことが求められている。

## 高岡特産産業のうごき

平成 30 年 3 月 発行

高岡市産業振興部 産業企画課

高岡市広小路 7 番 50 号 Tel 0766-20-1285